



5 蔵王 — 四季が楽しめる温泉スキー場

温泉やスキーで賑わう蔵王温泉について調べましょう。

とうじば 湯治場の高湯

蔵王温泉は昔、最上高湯と呼ばれ、昭和の中頃までは湯治を主とした温泉地でした。湯治客は一週間分の米と味噌などを持参して、自炊生活をしながら温泉を楽しみました。

温泉は湯花が混ざった乳白色で、泉質は硫黄と酸性が強く(pH1.25~1.6)、源泉も多く豊富な湧出量は県内一です。1900年間、親しまれてきた健康づくりと癒しの名湯です。

また夏は湯治の他に、避暑地として盃湖で舟遊びをする観光客や蔵王山頂で日の出を拝む「暁登山」の出発地でした。酢川温泉神社下に位置する旅館と土産物、共同浴場(上湯・下湯・河原湯)の温泉街とバスが発着するターミナルは、大賑わいでした。

温泉観光地・スキー場へ

昭和初めに中腹のドッコ沼や片貝沼付近に山小屋が建ち、冬の樹氷の素晴らしさやスキーを楽しむ人も出始めました。その後、上の台にリフトや空中ケーブル、横倉からはロープウェイが

- 蔵王観光の歩み
- 大正3年(1914)・山形師範学校スキー合宿
  - ・山形スキークラブ、冬に蔵王初登頂(樹氷初見)
  - 9年(1920)・山形〜高湯間バス開通(春〜秋、1日2往復)
  - 15年(1926)・最初のスキー大会(竜山山麓)
  - 昭和2年(1927)・冬季の馬ソリ輸送開始
  - 3年(1928)・山形高等学校コーボルトヒュッテ建設
  - 4年(1929)・最初の樹氷写真撮影
  - 5年(1930)・冬季の箱形馬ソリ定期運行開始
  - 9年(1934)・茂吉歌碑建立(熊野岳)
  - 11年(1936)・アーノルド・ファンク映画撮影
  - 15年(1940)・ドッコ沼畔に山の家建設
  - 16年(1941)・共同浴場「下湯」開設。旅館6軒新設
  - 25年(1950)・蔵王山、全国観光地百選で1位
  - ・高湯温泉を蔵王温泉と改称
  - 26年(1951)・上の台ゲレンデ開設、最初のリフト設置
  - 27年(1952)・冬季バス運行(除雪ブルドーザー導入)
  - 31年(1956)・蔵王村、山形市に合併
  - 32年(1957)・空中ケーブル(上の台〜見返峠)完成
  - 35年(1960)・冬季観光客数が夏季を上回る
  - 37年(1962)・蔵王エコーライン、蔵王ロープウェイ山麓線完成
  - ・観光客数年間100万人突破
  - 38年(1963)・蔵王国定公園指定、蔵王ロープウェイ山頂線完成
  - 40年(1965)・蔵王ライン開通、蔵王樹氷まつり開催
  - 42年(1967)・スキー客100万人突破
  - 48年(1973)・蔵王中央ロープウェイ完成、観光客200万人突破
  - 53年(1978)・蔵王体育館完成、蔵王ジャンプ台完成
  - 61年(1986)・西蔵王高原ライン開通
  - 平成元年(1989)・第1回蔵王国際ジャンプ大会開催
  - 25年(2013)・蔵王ジャンプ台大改修



大正期の高湯 箱形馬そり

ミニ知識 33

山荘「ヒュッテ・ヤレン」

戦後の吉田茂元首相の重鎮で東北電力初代会長であった白洲次郎(1902~1985)が、上の台ゲレンデ近くに山荘を建てました。スキーが流行する前の1957(昭和32)年です。

白洲は電気事業とスキー観光の発展を予測し、東武鉄道を組入れたロープウェイやリフト建設等に力を注ぎ、今日の蔵王スキー場発展の基盤をつくったひとりです。蔵王を気に入り「東洋のサンモリッツ(スイス)に」との思いがあったのです。

今、その山荘は白洲家の手から離れましたが、この記念すべき山荘を復元して保存活用しようと、熱心に活動している方々がおります。

旧山荘名は「ヒュッテ・ヤレン」でスキーは「うまくやれない(やれん)」と、白洲流にもじったと言われています。建物は欧風の外観で1階に暖炉、2階に当時としては珍しいオープンキッチンを設けた約70㎡の小さな山荘です。

東京都町田市にある「旧白洲邸・武相荘」は、白洲夫妻を慕う見学者が多い記念館です。旧山荘「ヒュッテ・ヤレン」は、規模が小さく資料も少ないのですが、蔵王温泉スキー場の発達を物語るひとりの人物の貴重な施設として、これからも大事にしていきたいものです。

ヒュッテ・ヤレン

地蔵山頂駅(1661m)まで運転され、スキーゲレンデとコースが全山に拡がり、春〜秋だけの温泉観光ではない、全国でも有名な温泉スキー場となりました。

また五色岳の「お釜」に通じる山岳観光道路「蔵王エコーライン」(昭和37)と「蔵王ライン」(昭和40)の開通で、観光客が急増し、南方に新しい温泉街としてホテルや保養所・土産店・スキー関連店などが拡がりました。

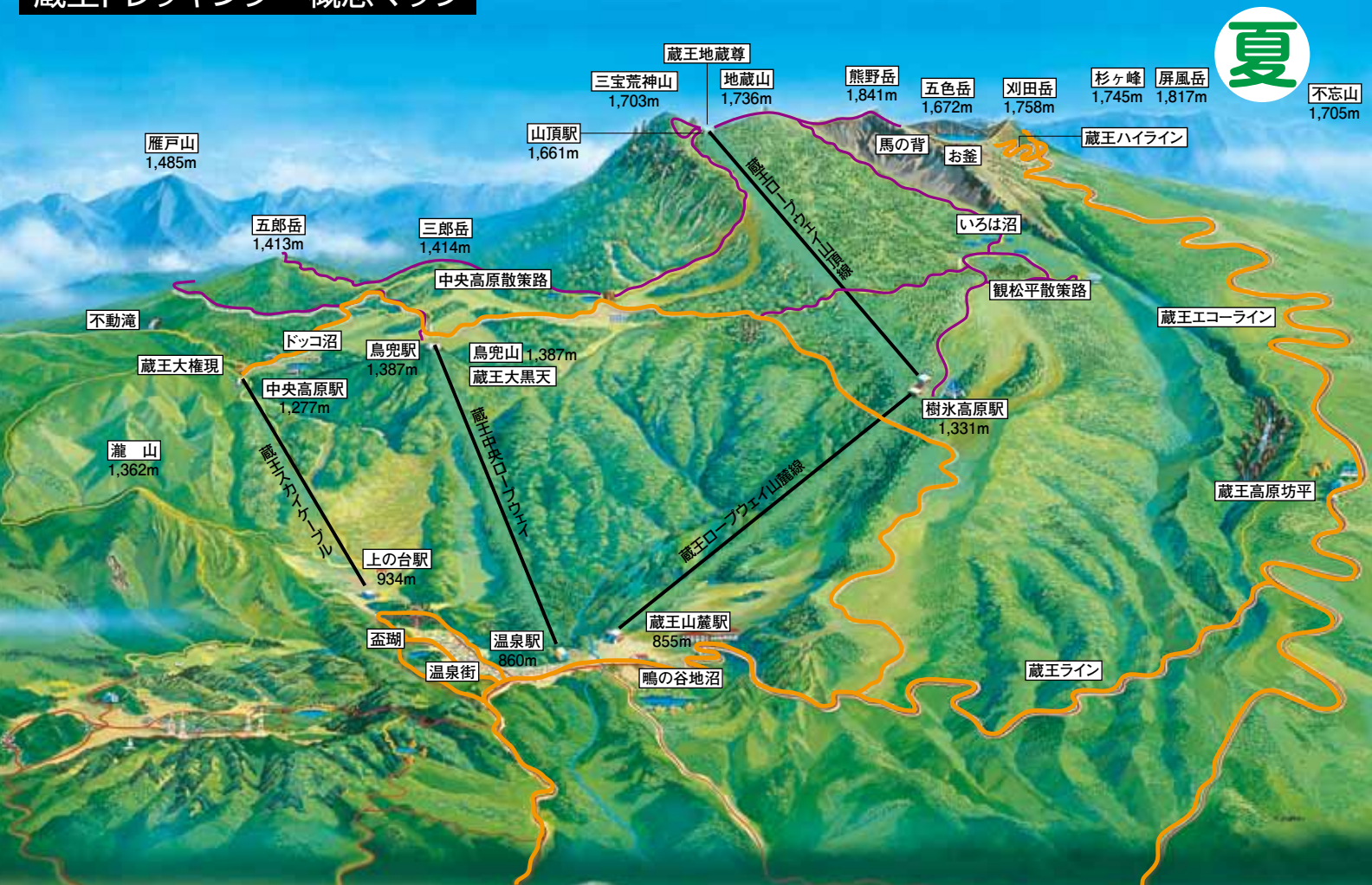
日本最大級のスキー場

豊富な温泉とパウダースノー、樹氷が揃っているのが蔵王温泉です。

現在は14のゲレンデと変化に富む12のコースに、42基のリフト・ケーブル・ロープウェイがあります(図1)。

特に地蔵山頂駅から約10kmの樹氷原コースは、スキーヤーやボーダーに根強い人気があります。しかし近年、台湾などから冬季客は増えていますがスキー愛好者の減少が大きな課題になっています。





観松平・いろは沼でのトレッキング



大露天風呂

## 蔵王は連峰

蔵王山という単独の山名はなく、奥羽山脈の一部である蔵王連峰をさします。主峰の熊野岳・地蔵岳・刈田岳・五色岳・三宝荒神山などの総称です。

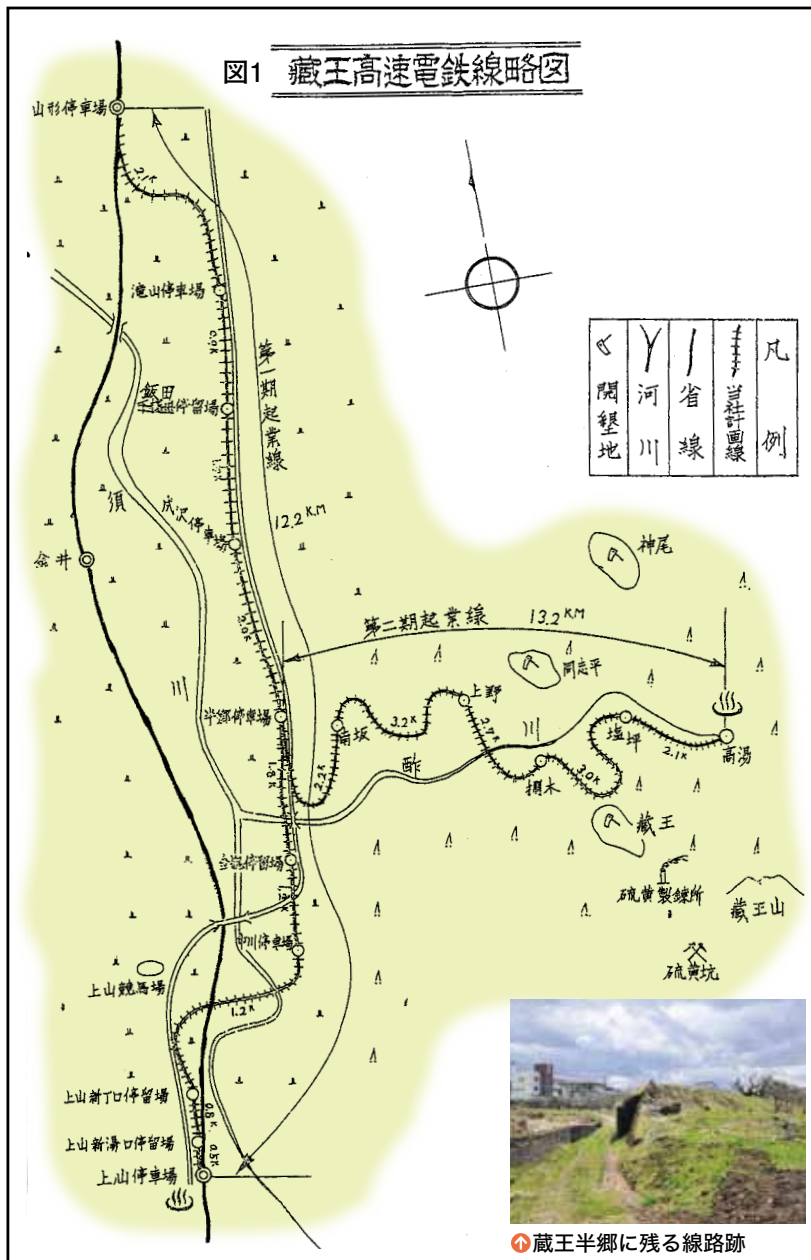
昔の山形市の子どもたちは、蔵王温泉から歩いて暁登山やお釜見学に行きました。朝焼けや遠くに見える吾妻山や月山、飯豊山、鳥海山などは、一生忘れられない光景となりました。現在、山形市の小学校で蔵王登山は少なくなりましたが、スキー教室を実施していることは、郷土の良さを実感する誇りある行事のひとつであり、こうした体験が郷土愛を育むきっかけになっています。

## 観光の多様化

平成に入り、観光客は、団体よりグループや家族主体に変化しています。その楽しみ方も多様になり、豊富な温泉で身体と心を癒し、大自然の中で広げるトレッキング、高山植物のコマクサやチングルマ・ハクサンチドリなどの観賞、中腹のドッコ沼やいろは沼で湖沼とブナ林の散策、地蔵尊や旧道の歴史巡り、冬の樹氷観賞、スノートレッキングなど多岐にわたります。

観光地として更に発展するには、音楽祭や樹氷まつりなどのイベントだけでなく、蔵王の「宝」である豊富な温泉と四季折々の自然を活かした年間を通して楽しめる温泉地であることが必要です。人気の高い大露天風呂を積極的にPRする等、再度訪れたい魅力ある蔵王を更に発信していく事が求められます。

## 図1 蔵王高速電鉄線略図



蔵王半郷に残る線路跡

## ミニ知識 34

## 幻の蔵王電鉄

1948（昭和23）年に、山形駅から半郷を経て高湯までの「蔵王高速電鉄」が、地元資産家らによって計画され着工されました（図1）。しかし、線路や車両ができたものの12年後に廃止となりました。その訳は、朝鮮戦争にともなう物価高騰や交通業者間での摩擦などが重なったようです。

土盛りした線路跡は、現在蔵王半郷にわずかに残っています。地元では「電車道」と呼ばれ、果樹畑になっています。昭和50年代までには、元木や成沢にも残っていました。これらの歴史を語る人は少なくなっています。

また日立製作所に発注し完成した車両は、玉野市営鉄道と高松琴平電鉄に譲られ、活用されていました。

半郷から高湯までの交通の歴史をみると、大正初期には一日一往復の荷馬車、1920（大正9）年からバスが運行しましたが、雪の山道を登ることはできず、昭和初期から馬そりやあんかで暖をとる箱形馬そりが活躍しました。それは蔵王ロープウェイ樹氷高原駅に展示されています。

除雪車は1951（昭和26）年から使用され、冬季の自動車やバス運行も可能となり、スキー客や樹氷鑑賞者の増加とともに、今日のような完全除雪体制になったのです。